‘ὁ κόσμος, ἀλλοίωσις· ὁ βίος, ὑπόληψις.’

4号 1989.12.16

文・編集・発行
恋怪子

LIVE：横関敦 1989.11.16 広島ウッディストリート

横関敦（キャンディーロ）
―バカ系ロックとりあえずツアー―
（TRIADレーベル）

LIVE TICKET
WOODY STREET
'89.11.16 (木) ¥2000 (税) ¥2300 1DRINK付
※中間出し退場・再入場不可

↖ウッディ・ストリートのチケット

奇妙なギター。ピアノ，キーボード，ベース，ドラム，それにギター。そのなかでギターの音だけが弱々しくひびく。弱々しいんだけど，はっきりした「何か」はいちばんギターから伝わってくる。この「何か」ってことばにならない。いくら探っていってもことばが見つからない。今までライブで見たどのギターともちがう。

私がギターという文字を書いたり，「ギター」ということばを口にするときは，必ずそこにロマンチックなものが想起されるのだが，横関敦のギターにはそういうふうに心がゆれない。力の限り，心の限りを傾けてひいている三柴江戸蔵のピアノの傍にいて，強力なドラム，ベース，キーボードに囲まれていて，ほとんど動かず，表情もかわらずギターをひいている横関敦。弱々しい，だけど魅惑的なものが伝わってくる。CDのタイトルは「DINO SAUR」となっているが，地球上に恐竜たちが生きていた2億年の昔から現在までずっとつづいている「時間」という細くて弱々しい1本の線が，横関敦のギターのうえで，細くて弱々しい音を奏でている。

LIVE：BURST HEAD 1989.11.12 原宿歩行者天国

この日はロックンロールが効いていて楽しかった。時流の助けのない現在，あれだけPUNKをやっているのってすごい。PUNKを選びとっていることが感じられていい。オリジナルもSEX PISTOLSやTHE CLASHのコピーも同じようにパワーがあって，きごたえがある。ヴォーカルがいちばんだけど，ギター，ベース，ドラムもそれぞれはっきりした持ち味がある。ヴォーカルの人が歌のあいまにめずらしく話をして「さっき，リボンをつけた子が話しかけてきて『ビートパンクやってるんですか？』ってきかれた。あきれてものもいえねえ」というので笑ってしまった。パンクということばにはビートということばがついているのがあたりまえの子どもたちがいるということだ。たしかにBURST HEADはきたなく音楽をやっている。だけどそれは人間誰しもが持っているきたなさ。きたないといって目をそらしたっていいけど，ないことにはならない。BURST HEADはPUNKを一点でつかまえて その一点を突き通している。その一点のなかに，人間のありさまが全部ある。きたないといえるようなものも，美しいといえるようなものも。

LIVE：DOOM 1989.11.22 インクスティック芝浦

DOOMというと，私にはあのベースが圧倒的なものだったが，10月7日EXPLOSIONから，それがかわってきた。この日のライブではベースがベースパートをやっている感じがした。もちろん，すごいベースであることはかわりないが，ギター，なかなかきかせるものだった。ドラムもすごくて，後半目がくぎづけになった。ギター，ベース，ドラムがそれぞれものすごくて，それがみんな重なりあって，バチッときまるのだから，ものすごいものすごさ。どういうところから来たのか，どういうところに往くのか，そういうことを一切感じさせず，DOOMの全てを現在に出している。DOOMは比類ない音楽である。

WORDS：氷室京介

「うん!! 皆なクソだと思うもん。ウンコみたいな奴ばっかりでバンドなんかやる資格がない奴が多いよ」（宝島1月号P.40）「それはやっぱり今のバンドブームみたいのが影響してる？」という質問に対して。

氷室京介は，ロックンロール専門学校のヴォーカル科にいって「あなたにはバンドをやる資格があります」という国家試験の免状でもらったらい。マスメディアにおだてられ，口車にのってその手先になって，なにエラソーなこといってんだよ。バンドブームがドートカ，コートカ，鬼の首でもとったみたいに。BOOWYかなんかを，カッコイイ！スゲェ！と感じてバンドやる子たちがゴチャッといてライブをやる。そしてテレビや雑誌にでる。それがなんだっていうんだ。それはあんたたちのやったことなんだよ。バンドブームというようなマスメディアのいいかげんなことばでひっくくるな。バンドブームなんてもんはマスメディアの中にしかありゃあしない。ストリートにはスゲェバンドがゴチャッとあるぜ。

恋怪子 ON TOUR 11/15～11/19

11/15 福山の「ポレポレ」という店でシャーリー・シーザーをビデオで見る。お店のマスターのバンドTWO MINUTES のテープをコーヒーのみながらきく。「なかなかいい。松浦駅近くの「前原邸別荘」で反知症人の「誰もぼくの歌を描けない」というLPをきかせてもらう。11/16 横関敦広島ウッディストリート十，11/18大阪バハマでビビのFIVE GANG ROCK'ETとティラノザウルスのライブを見て深夜バスで大阪を出発 12/19 早朝東京着。たのしかった一。

CD：ザ・タイマーズ

タイマーズのCDをかけたのに，きこえてきたのは「燃やしてくれ，さえない時は」と歌うRCサクセションの清志郎の声。えっ，なにこれ？「偽善者，偽善者…」「いくら偉い人でも，あたりまえだろう，そんな権利はないさ…」うーん，声は清志郎なんだけど，ちがうなー。「気がつきゃあ軽いサウンドばっかりじゃござんせんか。遠い遠いあの日のサイケデリックサウンドやリバプールサウンド，…いったいどこにいっちゃったんでございやしょうねえ」あ，やっぱ清志郎じゃない。清志郎だったら，こんなジジイな歌歌わないもんね。どこかにいっちゃったのは，ゼリー，あんたのハートって奴でございますよ。あんたのトランジスターラジオにゃ軽いサウンドしか入ってこないんですかい？「44年たったいま，まだ苦しんでいる人がいるのに，どうして原子力がそんなに大事なんだろう」清志郎ならこんな陳腐なこと歌わない。「急いで帰ってへらへら笑うぜ」ザ・タイマーズ」あー，やっと終った。タイマーズって音楽がいいんじゃなくて，雑誌がおもしろおかしく書きまくっている学園祭のアイドルバンドなんだ。そんならカンケーネエ。タイマーズのライブにいって「キヨシロー，カッコよかった！」なんてコーフンしてるのは清志郎をよく知らないからなんだ。なーんだ。そうだったのか。

LIVE：ティラノザウルス 1989.11.18 大阪バハマ

これまで生きてきた無数の現実空間は，プラスの縦軸とプラスの横軸に区切られたプラスの平面上で，時間と場所が交差してできた無数の点だった。その一点を生きるには，論理のひとつもあれば思考のひとつもあれば事足りた。その時々に見合った論理も思考もすぐに見つかったから，常時，つじつまが合っていた。現在，その座標軸で区切られ，すっきりしていた平面が歪んで捩れている。時間と場所の交差が定かでなく，プラスもマイナスも曖昧模糊。

永いあいだ，夢の中という牢に鎖いでおいた私が，目覚めているときの私の肉体を獲得した。牢の中でたらふく夢を喰って生きつづけていた私は，現実生活で思考や論理に鎖られ，痩せ衰え，へとへとの私を打ち倒すまでになった。鎖を切った者は，ティラノザウルスのギターであったろう。ギターを導き人に，生身の私が居場所を失くせるティラノザウルスの宇宙にワープしていった。

あの歌詞。ことばだけをここに書き出しても，あの異形ぶり，異相ぶりは感じたとおりには表わすことはできない。「つぶれた眼球にコンタクトレンズ，性格俳優たちがバベルの塔を登っていくのが，俺たちには見えるぜ」「少し趣味の悪い少年たちは夢見た，雨と砂と星の数に紛れたら，下劣な夢の症候にたどり着くと」。現実生活のことばのレヴェルからは決して湧いてこない，これらの歌詞が，仮面劇のようなメイクとコスチュームと，仮面性のある声と，電気的に増幅されたギターと，ベースと，ドラムと，ひずみあってロックンロールになる。

ティラノザウルスの宇宙では，正気を狂気とすることも，狂気を正気とすることも，私の思いのままだ。1989年11月18日，旅先の大阪心斎橋のバハマという見世物小屋みたいな，地下の小さなライブハウスで，生命がけの想いをかかえて座っていた私は狂気だったのか，正気だったのか。ステージで赤や青のライトが点滅していた。私の狂気と正気も点滅していた。

「銀の鍵」のさし絵。

カーターは多くのものを記されているがままに読みとり，あまりにも多くの人と話をかわしていた。悪気のない哲学者たちが教えてくれたのは，事物の論理的な関係を調べること，そして思想や空想が形造られる過程を分析することだった。驚異が失くなってしまったいま，人生のことごとくが頭脳のなかの一連の絵にすぎず，そのなかでは現実の事物から生まれるものと内奥の夢想から生まれるものに何のちがいもなく一者を他者より重んじる理由とてないことを，カーターは忘れはててしまった。確固として物理的に存在するものを崇敬せよと，慣習がやかましくいい聞かせ，幻視のうちに生きることをひそかに恥じいらせたのである。

H・P・ラヴクラフト「銀の鍵」より。

11，12月の!!!ライブ

12 横関敦 パワーステーション 1/10 ティラノザウルス ラ・ママ この日録ったテープばかりきいてる。1/25 JUN SKY WALKER(S) 市川市文化会館 12 LOVE SICK LOVERS 下北沢屋根裏 12/3 ボイラーズ 原宿歩行者天国 THE BLUE HEARTSのマーシーの「日曜日原宿へ行って歩行者天国で踊ろう…歌の自由を楽しもう，それがロックだと思ちがいしてよ」という歌に対して「いいKいことをいっているのはお前らだけじゃない，はいつくばっていいKいことをいっている奴はゴマンといる」と声も魂もふりしぼって歌うブルースをきいて相手！次の日曜日もききにいった。また相手！ 12/14 アンジー 神奈川青少年センター 詩人三戸華之介とメンバーとでメルヘンをたっぷり。会場でCD（要金時代）を買った。Tシャツも買った。